

1. 目的

放飼養鶏は、立地条件に拘束されない、施設・設備の初期投資が少ない、労力が少ない、耕作放棄地や休耕田の有効活用ができるという利点から、今日注目されている。さらに中山間地域等の複合経営の一作物となりうると期待されているが、現在普及には至っていない。普及に至らない問題点として、放飼に適した銘柄の選定、汚卵・巢外卵（巣箱外に産卵された卵）の対策などがある。これらを調査・検討・解決することで普及を図る。

2. 試験方法

【試験1】放飼に適した銘柄の選定するため、ロードアイランドレッド、イサブラウン、ネラ、ポバンスブラウンを放飼場で飼養し、生存率や産卵率、卵重、規格外卵率、巢外卵率、飼料要求率、卵質、また飼いやすさを検討した。

【試験2】汚卵・巢外卵発生抑制を図るため、卵の上に糞が落下するのを防止するためのフタ付巣箱の効果を検討した。

【試験3】実際省力的に十分な飼養ができるか検討するため、みかん園内にパイプハウスを設置し、場内試験の結果と比較した。



写真1 フタ付巣箱



写真2 みかん園のパイプ鶏舎

3. 成績の概要

【試験1】生存率に大きな違いはみられなかった。産卵率は、ポバンス・ネラ・イサに大きな違いはみられなかった（図1）。卵重、規格外卵については、イサが週齢を増すにつれ卵重は大きく、また規格外卵も増えた。巢外卵は、ポバンス以外の3銘柄は初め多く発生したが、発生抑制対策を行い、また鶏自身も学習したのか巢外卵は減少していった。飼料要求率は、産卵鶏として改良の進んだポバンス、イサは値が低く、一方原種鶏のロードや卵肉兼用種のネラは高い値を示した。卵質に違いはみられなかった。

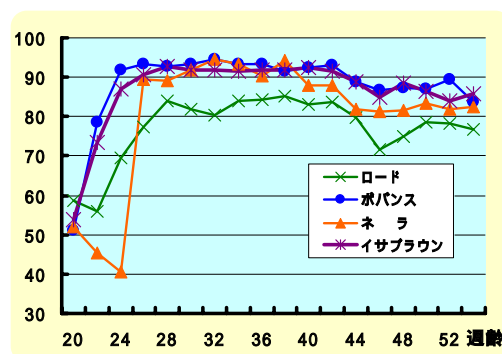


図 - 1 4銘柄の産卵率

【試験2】汚卵の発生率は、従来のフタ無のものとは比べて、汚卵の発生率が半分以下となった(図2)。またフタが巣箱を覆うことから、巣箱を暗くする効果が現れ、そのため巣外卵も過去のフタ無の時と比べて減少した。(図3)

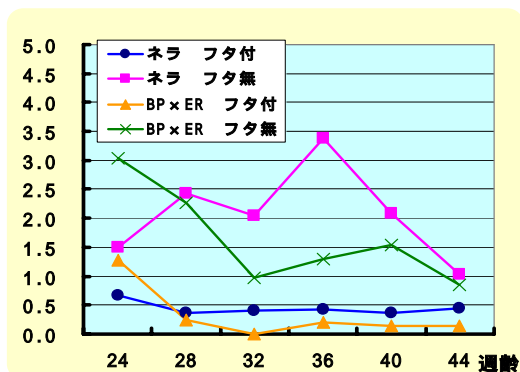


図 - 2 汚卵率

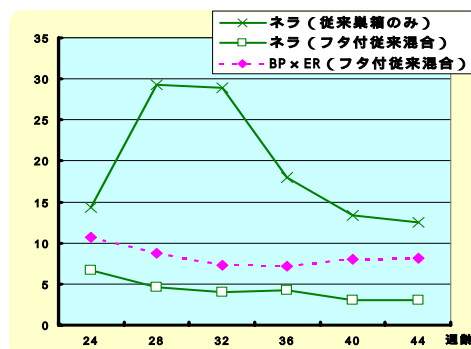


図 - 3 巣外卵率

【試験3】場内試験の結果と比べ、産卵率は成績が伸び悩んだ(図4)。その理由として、産卵初期にみかん園の隣でトンネル工事が始まったことや、暑熱時に産卵ピークとなったことが考えられる。巣外卵率は、場内試験と比べ、圧倒的に低い結果となった(図5)。その理由として、鶏は暗い場所で産卵するが、みかん園は明るい環境で巣箱が最も暗い場所なのに対し、場内は鶏舎を用いているため、巣箱の他鶏舎内の隅等暗い場所があること、また、現地では産卵初期に夜は鶏を巣箱へ戻すという調教を行ったため、その効果が現れたということが挙げられる。

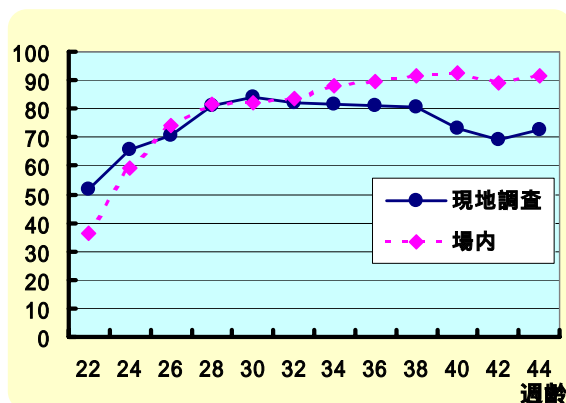


図 - 4 産卵率

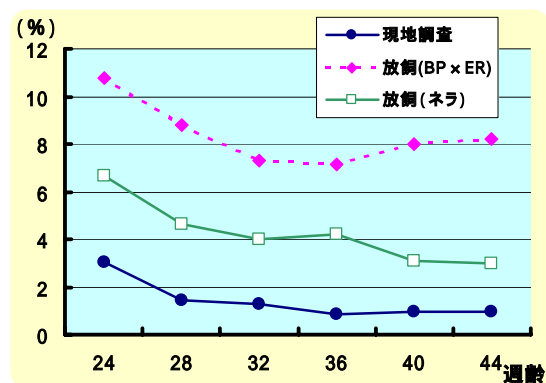


図 - 5 巣外卵率

4. 普及上の留意事項

ネラが経済性を加味した上で、いかに粒ぞろいの整った卵を採れるかという点や飼いやすさを重視した結果、ネラが放飼に最適であると考えられた。

汚卵・巣外卵抑制には巣箱にフタをつけることが有効であった。

また現地調査の結果より、パイプ鶏舎という低コスト施設でも十分飼養可能であるということが実証された。

(研究員・寺井智子)